事例

日本の食文化における「箸置き」の意義を伝える取組

佐賀県陶磁器商業協同組合（佐賀県）

佐賀県陶磁器商業協同組合では、価格が安く、手軽に購入してもらえる箸置きを通してテーブルウエアに関心を持ってもらい、そこから食卓や食事全体に関心を広げてもらうことを狙いとして、令和元（2019）年から「肥前・有田箸置きプロジェクト」を始めました。

箸の普及

箸が広く普及するのも、この時代（注：奈良時代）で、７世紀ごろから使われ始めたことが出土遺物から分かります。始めは役人層が主でしたが、８世紀も末ごろになって都の庶民にも広まったとされています。ちなみに箸と一緒に匙も中国から伝わりましたが、基本的に匙は日本に根付きませんでした。

（出典）国立科学博物館　特別展和食　公式ガイドブックp93

「肥前・有田箸置きプロジェクト」では、同プロジェクトのInstagram公式アカウントで、人気の箸置きや組合員おすすめの箸置きを紹介しているほか、専門家による箸置きを使った学校給食での特別授業等を行っています。

「肥前・有田箸置きプロジェクト」のビジュアルイメージ

具体的には、有田町立有田小学校で4年生を対象に、令和元（2019）年11月8日に「学校給食で箸置きを使おう」という特別授業を実施しました。NPO法人食空間コーディネート協会の講師が箸と箸置きの歴史、箸置きの役割や利点（箸先が食卓に触れないため衛生的で、箸置きの形や絵柄によって食事の雰囲気を変えるなど楽しさを演出できること）等を説明しました。

「夏休み子ども陶芸教室」の様子

また、子供たちが給食を食べる際に箸置きを使うことで箸置きに興味を持ってもらいたいという思いから、同小学校の給食用に箸置きとスプーンレスト（スプーン置き）100個を寄贈し、令和元（2019）年11月21日には、同小学校の10、11月生まれの児童と保護者を対象に寄贈した箸置きとスプーンレストを使った誕生日給食会を実施しました。いずれは、箸置きを使った給食を有田町の小中学校に広げていきたいと考えています。

令和2（2020）年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大対策のため学校関連の行事は中止しましたが、8月に有田町の陶芸体験工房「ろくろ座」で、小学校4年生から6年生までを対象に箸置きを作ってもらう全3回の「夏休み子ども陶芸教室」（有田町公民館・有田町教育委員会主催）に協力しました。この教室では、箸置きの型押しから、焼成、上絵付けなどを行い、オリジナルの箸置きを作ります。

第3回では、有田町食生活改善推進協議会の担当者から、配膳の正しい配置や箸置きの意義、和食の特長、旬の野菜、箸の持ち方などの日本の伝統的な食文化について子供たちに説明した後、大豆や小豆を箸でつまんで別の皿に移していく「豆移しゲーム」を楽しみました。アンケートには、「箸置きの成型が難しかった。」、「色がどう出るか不安だった。」、「オリジナルの焼きものが作れて嬉しい。」などの言葉が並んでいました。

次世代を担う子供たちには、箸置きを日常的に使うことが当たり前と思ってもらえるよう、有田町での活動を継続していきたいです。